

## 船井情報科学振興財団奨学生レポート/第二回

2019年12月

Department of Economics, Princeton University 山岸 敦

プリンストン大学の Ph.D.課程 1 年生になりました、山岸です。今回は経済学博士課程 1 年目がどんな感じの雰囲気なのか、そしてその環境下で最近考えていることについて少し紹介させていただきたいと思います。

### **Part 1: 生活と研究の近況について**

#### **経済学博士課程 1 年目の生活 = 勉強&勉強&勉強 ?**

先人たちの体験談からほぼ予想通りだったので驚きはありませんでしたが、それぞれの授業の詰め込み教育具合には凄まじいものがあります。少なくとも今回僕が履修している 3 科目に関して言えば、例外なく毎週毎週たくさんの宿題を出され、しかも締め切りはたったの 5 日後、といった具合です。一回一回の課題をこなすことは十分可能なのですが、これが毎週毎週続くと相当な時間を取られてしまい気力体力をかなり消耗します。もちろん、決して内容も簡単ではないです。

ただ、その分やりごたえ、勉強しがいがあります。正直に言うと、東大の大学院で似たような授業を受けた際は研究らしい研究を一切やる以前の状態で、マクロ経済や計量経済といった科目は研究における必要性が実感できず苦勞しました。しかし、その後の研究を通じて具体的な研究手法の活用方法に触れるにつれ両科目は自分の将来の研究でも役立つということが実感できたため、今回は自分の研究に役立てる！！というモチベーションを持った上で勉強できているので東大で勉強した際に比べて知識の吸収効率は格段に良くなっていると思います。(実際に中間試験の成績はなかなか良かったです、やったね！)

基礎的な知識の取得に時間を取られているとはいえ、研究も継続できています。少なくとも秋学期は必修科目のミクロ経済を免除してもらうことができ、研究時間を捻出できました。この時間を利用して上級生向けの専門科目である Public Finance の授業を受講しつつ専門分野の研究を追ったり、いくつか研究アイデアを考えてみたり、日本時代にやり残してしまった論文を改訂したりと、研究面も日本時代とそこまで変わらない程度の時間が割けています。教授陣の研究に対する要求水準は非常に高く、そのレベルに到達するにはさらなる修行が必要だと痛感させられていますが、総じて、第一歩目としてはなかなか良い滑り出しではないかなあと考えています。

### **Princeton 生活所感**

Princeton での生活は選択肢が多くはなく非常にシンプルです。例えば昼食については、東京では安くて美味しい店がたくさんあるので、今日のお昼は何を食べようかなあ…と思

案するのがささやかな楽しみでしたが、プリンストンではほぼ毎日昼食はセミナーで無料提供される（！）サンドイッチになりました。ただ良いように考えれば、余計なことを迷わなくて済むので結果として本業に集中できている感はあります。一点気を付けているのが、気晴らしが少ない分一旦メンタル面で苦しくなると立ち直るきっかけが少ないかもなあ、という雰囲気がある点です。さぼる時は思い切ってさぼり、ストレスをため過ぎないことは心がけています。たまに友人とお酒を飲んだり映画をみたり、または一人で安いワインでも飲みながらゲームをしたりギターを弾いたり…という時間がちょっとした息抜きになっています。

ニューヨークにも時折足を延ばしました。電車で 1 時間ちょっと揺られればすぐにマンハッタンの真ん中に行けるので、都会の雰囲気が欲しい場合もなんとかなります。学園都市という特徴や距離感等を考えますと、僕のイメージでは、プリンストンーニューヨークの関係は筑波ー東京の関係に近い気がしています（筑波の方が都会な気はしますが…）

## **研究成果について**

日本にいた頃から継続している研究についていくつか朗報がありましたのでお知らせいたします。まず、私と東京大学の岸下大樹さんとの共同研究「Contagion of Populist Extremism」が大阪大学社会科学研究所より森口賞を受賞しました。各国の政策を有権者がニュース等で観測できる場合、ポピュリズムに代表されるような望ましくない政策が国際的に波及してしまうことを理論的に示しました。さらに理論に基づき波及過程の特徴づけを行い、各国にとって望ましい政策がどれだけ似通っているのかが決定的に波及過程に重要であることを示すなど、ポピュリズム伝播について新たな性質を明らかにしました。

第二に、香川大学の福村晃一さんとの共同研究である「Minimum Wage Competition」が International Tax and Public Finance という雑誌から改訂要求を受けました。グローバル社会で最低賃金がより波及しているように見えることを EU のデータを用いて論じたうえで、移民など人々の移住行動に注目すれば理論的にその現象を説明可能であることを示しています。まだ掲載確定ではないので、今後気を抜かずに鋭意改訂し、論文の掲載を目指します。

## **Part2: 最近考えていることについて**

### **「大きな研究」 vs 「小さな研究」**

アメリカに移り環境が変わったことで自分の研究スタイルを見つめなおしています。ここで、ちょっと脱線して最近考えていることについて書かせてください。研究スタイルの在り方として、小さな研究でもいいから少しずつコツコツ積み上げていくのか、それとも大きなインパクトのある研究を、短期的な小さな成果を犠牲にしてでも狙っていくのかということです。

もちろんこの両者は必ずしも相反するものではありません。小さな成果を出しつつ、どかんと大きな成果も出せる人というのは存在します。しかし、努力でこの2つを両立するには、一日は24時間しかないということを考えればどこかに限界があります。つまり、どこかでヒット狙いのイチロー的なスタイルにするのか、それとも打率は犠牲にしてでも大振りホームランを狙うスタイルでいくのか、ある程度決断をしないといけないわけです。

アメリカの経済学業界は後者の機運が非常に強く、とにかくインパクトのある論文を書いて良い学術雑誌に論文を載せるよう、かなり強烈なプレッシャーがかかります。もちろん学問を大きく進展させ、その潮流を変えていくのはほんの一握りの革新的な論文であることは事実です。そうしたものを目指せというのはある種自然ではありますし僕自身もそういう論文を一生に一度は書いてやりたい！という気持ちを持ってアメリカに来た…という面はあるわけです。その気持ちは今も変わっていませんし、こちらに来て強まった気もします。

ただその一方で、学会的に「小さな論文」とされる論文に必ずしも意味がないのかというところとそれも違うと個人的には思うのです。例えば、欧米のデータを使って望ましい所得税率はこれくらい！というのを算出した論文はそれこそ山のようにありますが、日本のデータを用いた研究は、（恐らく政府が行政データの公開に消極的であることが理由で、）限られています。ここで仮に、分析手法は欧米で用いられたそれと全く同じであるものの、日本のデータを用いて日本の最適税制を論じた論文が出現したとしましょう。これは手法的には欧米での先行研究と全く同じなので、世界の経済学会からは恐らくそれほど高い評価を受けないと思われます。ですがきちんとした分析であれば日本の税制の大幅な改善につながりうるわけですから、日本にとって非常に価値のある研究である可能性は十分にあります。

PrincetonにはFirst Year Adviserという制度があり、1年生には仮の指導教官が割り振られます。折角なので彼にこういうような、大きい論文と小さい論文の悩みについて少し相談したところ、「学部でも大学院でもどんな授業でも良いから、シラバスに載ってもおかしくない、と思えるような研究を目指しなさい」という答えが返ってきました。シラバスに載っているということは次世代に伝える価値のある研究だから、というのがその心のようにです。ああそうか、この基準であれば「経済学界的に」大きな研究か小さな研究かに関わらず、次世代に伝えられる価値のある研究をすることに意味を見出せるなあと合点がいきました。例えばこの基準であれば、先ほどの日本の所得税の研究は日本経済の授業のシラバスに入っているとしても十分違和感がない、という判断が下せると思います。

もちろん、どこでどんな評価をされたいか（例えばアメリカの経済学者界隈なのか、日本の行政なのか…）などによって、現実問題としてどんなシラバスに載ることを想定すべきなのか変わってくると思います。それでも、自分の研究の社会的な価値がどれだけあるのかをイメージする方法として、とても具体的で良いと思いました。この先自分がどこで

研究をすることになっても、この基準は心のどこかに留めておきたいなと思います。

(余談) 実は上でさんざん書いた大きな研究も小さな研究も、どちらも他者からの評価によって研究の価値を見出しているという点では同じです。僕の中でそれと対称的なのが「趣味の研究」というやつです。これは学問への直接の貢献があるか、世の中の役に立つかという外の世界からの評価によって価値が生まれる研究ではなく、単純に自分が興味があるから、だからこそ価値があるというタイプの研究です。このタイプの研究はかたんに自己満足に陥ってしまう危険が大きいと思っています。ですが、その一方で、自己満足こそ人の幸せの本質で、かつ研究者になる醍醐味でもないかなとも思うわけです。事実、東大時代に受けた社会心理学の授業である教授が、「これは趣味でやった研究なんだけどね…」と切り出した際の口角の緩みが今も忘れられないのです。「趣味の研究」のアイデアを練るのは、僕にとってはとても楽しいことなので、こちらも副業/趣味的に細々と行えたらなあ、と思っています。

末筆ながら、船井財団の皆様のご支援のお陰で気苦労の少ない留学生活を送らせていただいておりますこと、改めて感謝申し上げます。今後とも精進いたします。